

近世名家書畫談二編

一

津田文庫
文庫 1
1721

10

15

20

25

30



自序

全

秋香丹
待風吹
能自
素
秋香丹
待風吹
能自
素



丁巳文庫

甲辰初夏

近世名家
書畫談二
編
全四冊
東都雲煙堂
發兌



1721

010190609354

近人好古書畫。唯觀之。其是求
 耳。至其剝蝕者。無以落款。去與此者
 不顯著。則雖尤物。亦如土女。嗚呼
 此風一長。流古日窮。真者日湮。而
 後世將不能窺古人之精神。豈
 不亦哀乎。余乃不自揆。妄著此編。
 救其弊。并於萬分之二。因呼椿山先
 生。字蓮。以弁卷首。亦所以見拾珠
 玉於泥中。之意也。甲辰年
 烟安西於老溪溪



書畫談續編序



王逸少嘗謂。年在桑榆。彩絲竹
 以陶寫。此之激矣。文勢一危。一
 娛。唯賴於衰暮。事之或可也。然
 猶為危險焉。況如強壯。假之為
 適。其不伐性自天。以玉蕩而為
 一。弗棟。其來。勸業之士。竊以學

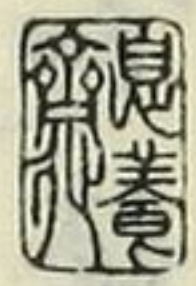
學。其為母。復心力。獎矣。思一口。間。
以。盈。源。產。煩。抑。者。惡。乎。寫。也。
必。求。曠。襟。爽。懷。惟。一。室。清。林。之。
焚。香。淪。茗。法。古。名。畫。交。互。展。
觀。有。此。靜。好。耳。是。乃。尚。古。
人。之。載。之。且。曾。遇。之。其。樂。果。
何。如。哉。安。西。雲。烟。生。少。濤。之。畫。

既深於法。賞述其所得。刊布之。
吾人爭觀。以復。今出餘蘊。暇。余。
其。常。因。翻。閱。如。次。其。通。以。高。
刷。吸。余。款。起。文。尾。今。老。美。如。得。
掃。一。室。既。圖。之。優。游。終。餘。年。
是。為。教。亦。善。耶。免。於。大。考。之。
嘆。何。必。用。習。之。輕。為。竹。節。也。

烟以冊視之。凡塵膠接。沉溺石
利。使而不及。徒定非醒。疾之
禁方仙丹也。邪。是為叙。發中
嘉平月。程松老朽。誤月舟之人
筆于後。孫之心。念。



書畫談續編序



作書畫難矣。然不若鑒書畫之。最難也。
何以言之。凡作書畫者。筆墨必良。縑素必
佳。而又有粉本法帖。可以依擬。研石猶披
堅甲。執利兵。以臨乎陣。是以拙于劣伎。
亦或有_下秦其功者矣。至鑒書畫。則不然。
蓋天下古書畫之夥。紛々紜々。不可勝窮。

而玉石混淆。真偽雜然。其所恃以鑒之。則唯一雙眼孔而已矣。此如夫有粉奉法帖。可依據也。是猶挺單身奮空拳。以當百萬之敵。自非有得神機。豈能免于挫衄乎哉。吾友雲煙主人長手賞鑒。其於真偽。慧眼如炬。一睨無所逃。余嘗出家藏數幅。覆歛遠印。使其鑒之。片言亭中。

石不謬一。嗚呼。雲煙之得神機。誠可畏已。宜乎其以此伎馳騁藝苑。而無一人交鋒爭衡者也。法年雲煙泄其所得。撰名家書畫談二馬。其談奇拔。其論精確。能使讀者厥角稽首。而英悍之氣未艾。今又著續編四卷。其造詣之深。闡發之微。較之前輯。殆有加焉。謂之賞鑒之堅甲利

兵不_二可_一乎。夫甲兵之於神機相去遠矣。然其堅利者。能使人勇武。則此編之出也。二安知_レ無_レ依據_下以馳騁藝苑衝突文陣者不興哉。余請張膽而俟之。

天保十五年甲辰抄秋油菴外史大橋

順撰



鼎齋生方寬書



近世名家書畫談二編卷之一目次

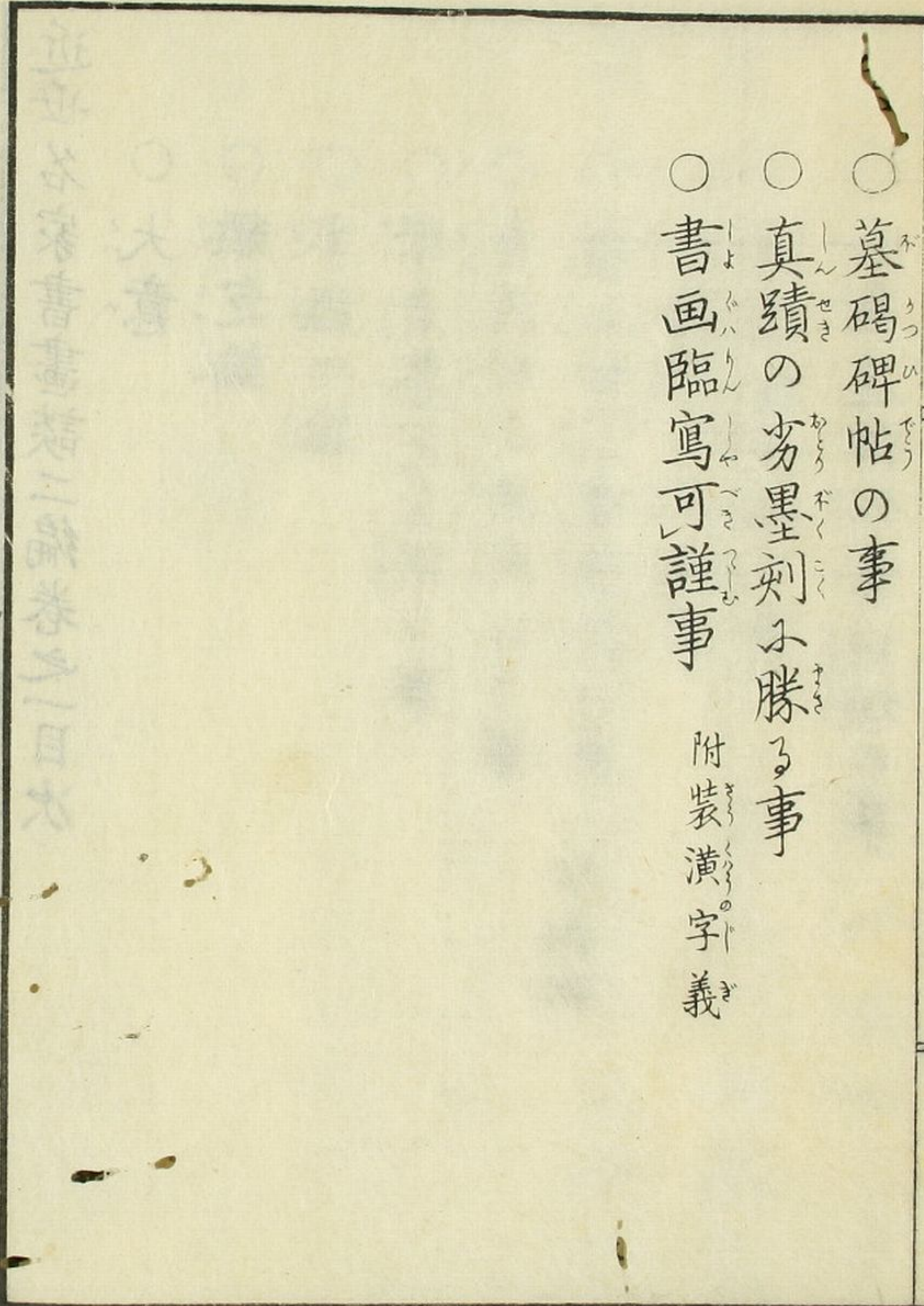
- 大意
- 鑑定論
- 半鑑の論
- 學者鑒定を誤る事
- 書画好小異同阿る事
- 藥山紫山書榮悴の事
- 妙語時小不遇事
- 圖樣雅俗好の事
- 和歌連俳作意好嫌の事

附茶論

○墓碣碑帖の事

○真蹟の劣墨刻小勝る事

○書画臨寫可謹事 附裝潢字義



近世名家書畫談二編卷之一

大意

雲煙子

安西於菟編次

唐羊士諤の句小畫披靈物態書見古人心と是書畫
愛玩の真訣少て餘事と共ふ語るべし蓋し書畫ハ
六藝の一ありて最上乘の好事なり故小古人も言聲
詩養心術と云り自ら書画成作者能く體認せざれば
又物心て文辞小あづかるその此意成知らざれば野鄙小
温雅の趣成得ず故小唐土の文士名家大家共小皆此技
小あり然共見地なく此技の小耽らば却て薄俗とあるあり

素より君子小近き遊戯ふて儉樸の多の—こまきバ能く其
道哉知る時ハ此好事小勝りる清娛何んや小人を
閑居して不善小入り富足の身哉もて安逸小居まバ
酒小耽り色小溺ま竟小ハ性命哉短宿るも自然の勢
あて此道小多よりなま故ちり此清娛哉以て小人富
有の身の淫樂哉防ぎ君子の正道小誘小便りとな
さんこと可なり必自餘の骨董女奴狷の業と共小語る
ことちのる画—

鑑定論

前編既小堅定之事哉論して宋湯屋が観画六法

乃とを舉ぐ又夏文彦が看畫の法を録はその條小
燈下小畫哉看る處うらむと云り是唐也文入看画乃
規矩小して尤かくあるべきことなり志のま共 我邦を
惣て辨給小博何くと哉常とよる風ありて是而已小
て毛鑑定の肯綮哉あま教所あり高陽山人の言小
學識あま目利定まらむと云々又學何るが故小
疑所ありて害となることもあるなり唐土ハ南北共小
文人多くして畫意おのづら文意あり 我朝ハ文
人ハ文人畫家者流ハ画家者流各別なるゆ和漢
雅俗小徹底する小何らざるもハ觀る處うらむ寸予前編

我述一時ハいま此業小入るべしと學者の説の或
 信ぞり今既小業小へりて累年頗る切磋の功或積
 多る小学者の説の或も小も據るべし又多く看る
 小を阿るべし能手の贋と拙作の真とハ實小毫髪の
 多るひも口舌小ハ説きざく真の真なるもの贋の贋
 なるものハ一目瞭然として鑒者或するを以て鑒定
 以て鑒定ハ實小一大事なりこゝ小又一説あり鑒定
 家而已小阿るべし萬る衆人より挙る時ハその言千
 里の遠き小達と然も其業の能と不能と他人
 知るべしその業小居る者ハ自然と知ることなり其
 實ハ

妄鑒なき共尊崇の人これを用ひてハ愚者ハあつて
 信じて瓦を以玉とて真鑒といふ時小遇ふは璞
 璧も瓦石と棄るる世小耳食と云ふ阿るて古人所謂
 耳或貴ぶの弊除きざく又精鑒小して真を贋と
 觀るあり漏鑒小して贋或真と觀る有り何まも精
 鑒とつて厚るべし一多び贋の真となりて其の精鑒
 小あつて贋と定まるありを阿るべし真物の妄鑒り
 遇ふて玉を瓦と愚人小捨るべしハ至寶の泥中小
 埋没して歎まざるも多るん是ハ書画の或も小あつて世
 其の事小於てを皆然り近世小かりて上古今鑒

家小人物の偽りこれハ天地造化の贋作と云ふは
目力越人小誇りて世人小一隻眼あること誠知らざる常
小疝氣有りて我意小随て真を贋と贋を真と
一系意小合はざる人ありて乞ふ時ハ真蹟小批難を
くよる小いり或ハ束脩の用意小よるることなど此類皆
人物の偽りして人道小何ら寸書画の偽物よりモ又
甚一かりあるかくのごとく妄人ある由一不真蹟の亦小埋
モ迷贋作の至寶となること実小歎かはしきことなる
むや予かくいふと病狂喪心小ハ云ふ也又按小文徵明
先生の贋蹟をモ真物なりと云はし類ハ君子の心

術を見る小是まじり
衡山先生 鑒識小精一なるは色ハ吳中の入ハ其鑒識
を拓る小贋物をモ真跡と云て往々多かりしを
此邦小探幽永真蹟のの鑒識ははる
小実小大名をなむべき人の所為なり畠山牛菴古筆
了佐まこれ小准む此輩ハ真を見て偽となし小
量の人小ハあざるなり

半鑒の論

己迷鑒者なりと思ふ人小不鑒なる者多し一をハ
治世小生まざる人兵学を好む攻城野戦の法を
暗記して我を勝敗存亡の機を得と云と思へる
類なり昔戦國の時趙の國小趙括といふものあり

若年より兵法を学びて天下小己小勝する者なりと
 思ふ阿る時趙王是を用いて大将と一秦の國と戦ひ
 一小勝と越得む軍大い小破まじりとぞ是兵家の
 之小あしむ萬多亦志り醫師が論をよくして療治
 を能せざる相撲手越よく知りて勝とを得ざる
 同一書画も時代傳記を知り或ハ花幅を以て收置て
 鑑定眞贋の所ふりてハ愚蒙なる人阿り是性の
 志のり一むる要ふして学びても至り難きや此心
 先生と崇めらるる時ハ鑑定を以て極てたまは
 意を以て門弟子小示す由一果して誤りしは多し

人の收斂の眞贋を辨ぐるはいと安きことなり也まが夜
 斂ふせんと思ふ時ハいとくさくさして鑑を鑑るること
 あり又ある鑒者ありとかく印章の事を論じて眞跡
 ある紙も贋なりといふさ迷ども絹統の類ハ押ときハ
 裝潢の仕方ふより斜歪ふたあることあり又印色の
 善惡毛種之薦席の之をどみて織洪の多し何
 まハ印のありきふて贋と定まべきふも何とむかる鑒
 家ハ印章なまそのふりてハ觀ることを得づらむぞ
 上古ハ落款はるこそ少一骨董刀劍のごとく無名ふ
 才鑒鑒するハいづれぞや當世利の爲とありまふ吠

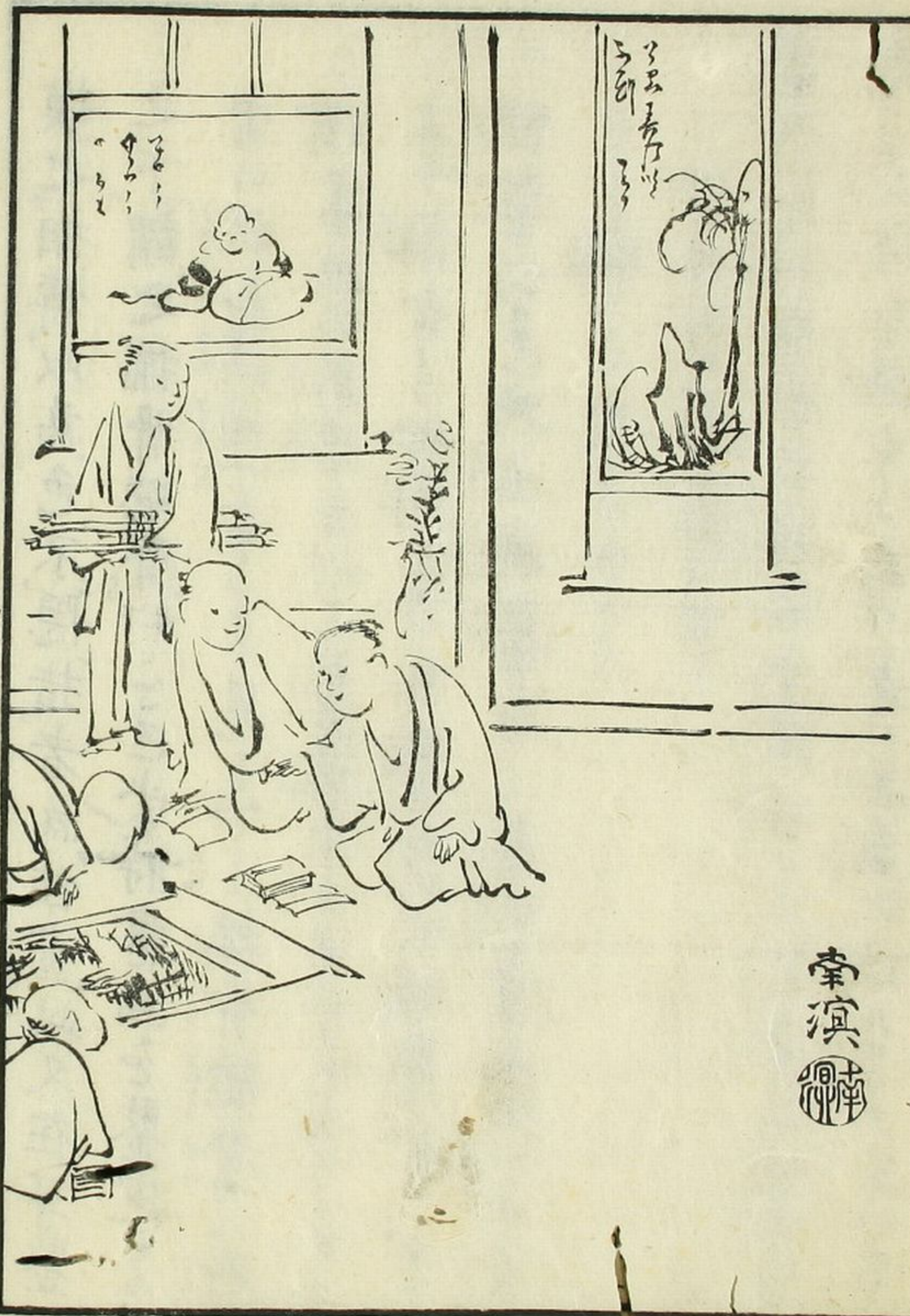
凡の徒のそて何そびとあるもの事ある故小言歎ふてハ
通用遠くあり——こそ何さ傳りて故小言今画共
小言落款そのハ商家の手て印を模造——おろ
そのまも多し是等ハ印あり共真跡ありとて
画うんといとく席上の兵法畠水練の徒の鑒識ハ大半
右の類あり志き共又難きこと小言ありとて又易きふ
何ぞ樂まよハおのづから會得て——

予ハ友素原善執一則を示して曰夢溪筆談を聞
る小書画を論じて云藏書畫者多取空名為鍾王
顧陸之筆見者爭售此所謂耳鑒又有觀畫而以手

摸之相傳以為色不隱指者為佳畫此又在耳鑒
之下謂之揣骨聽聲下こま當時書画を鑒定する
者の状和漢同一なること見るべし——揣骨聽聲ハ所
謂書画の形容を以て鑒識するその是なりを
より論なり——世間多く耳鑒何つて眼鑒はくなく
眼鑒何ま共亦神鑒なり——甚執書画の一小事
とて猶くのごときこと

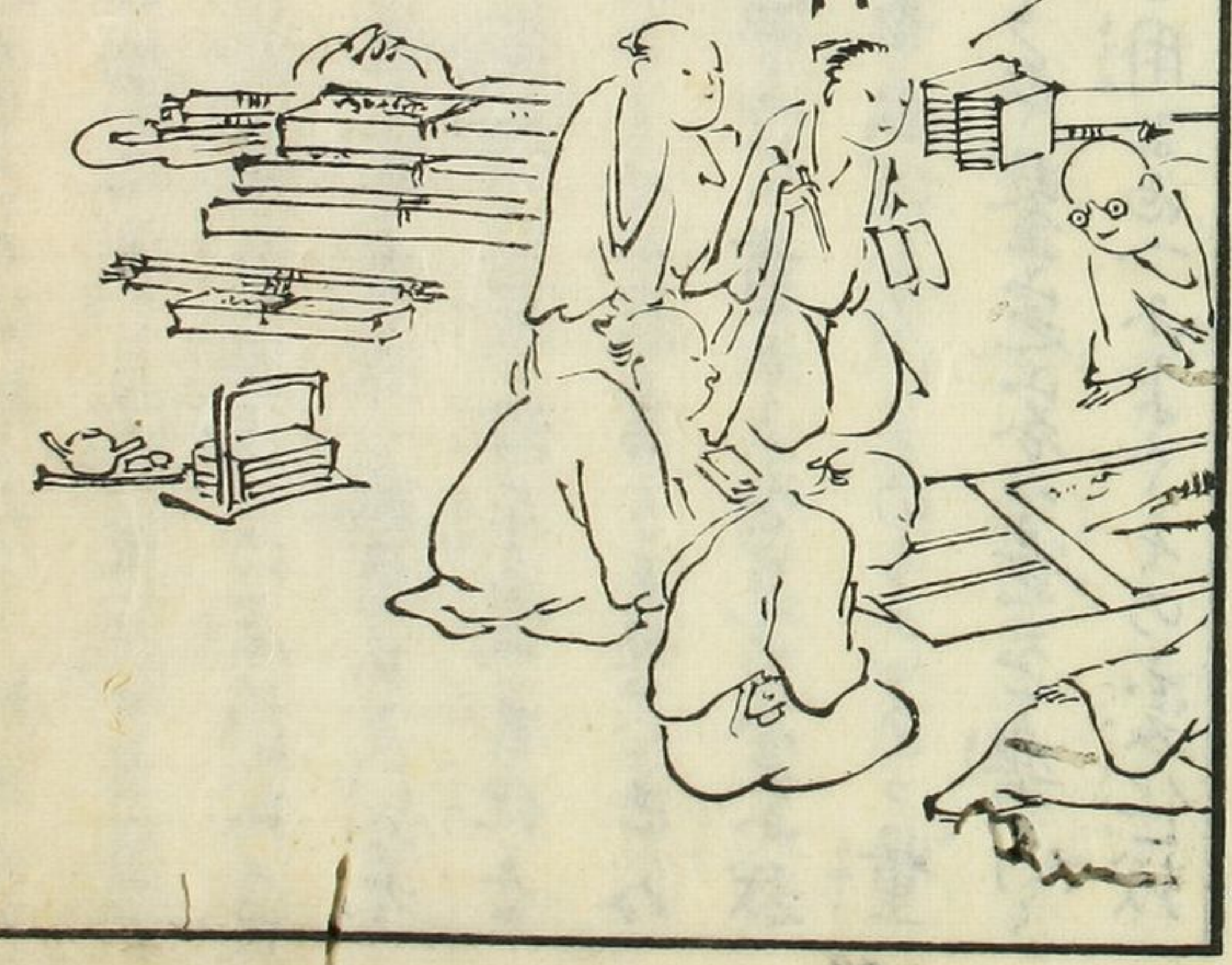
學者鑒定を誤る事

書画家儒醫歌誹諸家者流各その先輩の遺墨を
觀て真偽を談するあり是ハ無益の論なりと思はる



南溟

雲雨相逐
鏡面其其
心亦其
叔翁官中
書心
為頃便者坊



先鑒家と好事家との別あると或知るべし知之者
不如好之者好之者不如樂之者と云は其道なるを
能く知るべきふあはれ初年晩年中年の通ひあり
或ハ結構の常小異なるあり又ハ席書或ハ臨書あるは見
る所小よりの揮毫或ハ蘭醉の筆跡千變万化な
り香書といふも十年前小しハ我書と云思ハ迷ぬ
ことあり又他人ハ我書小做つて書くるを見て實小我
書なりと云ふことあり書畫或ハ其の已まらざる量
の外ハ觀ること或得ざるべし鑒定家ハ是を樂み
こまを道とてこころを用る由一ふよくその変化或

知る小いこと固よりなり今時高名なる老儒先生は
り其門下の書生常小古人の書を得て先生小歎
乞ハ先生云予頗る書畫を花貯はまじも他の真偽
を辨むる小いこと誰何某ハその道を得て能く真偽
或識る彼小見せて定免しめて可なりと是其の業の
大ひなる要なり諸家の僻論を思ふ小その人の書すま
文字あまば真なるを云贋なりといひ其詩文の面々
き小會ハ贋なるを云真なりといふあり由一ふ贋作
を云ふ者此意をさとりて又能く狡謀を云一贋
或肆ふまらふい

予聞るるありある学者生進つき脾胃よく
して忘るる食好むるが一時醫者のもとへ
て今日鮭を人よりあくりあるが食してゆくから
どやと申あくりし何ういふるべき功徳よき
物ふいと答へるまばやがて調味して夥しく食ふ
物身煩熱して四肢志きりふゆるこころむまの
醫師通りこりし六家内の人よび入きて毒魚と
きし故是まてハ多ぶらまじりしが何より美なる
哉贈りし人あまバ薄味噌を煮させなごう失刻
手紙をて尋しゆるりわらぶとの由返るるを

食ハま多れば何の通り之苦しとありといふ醫師
成りて眉小皺成よせ鮭味噌汁とハがてんや
鍋を見り小河豚汁なり是ハいふと驚くを亭主
るき息のりよりそま鮭ハ河豚の一名俗誤て是
をさけと漬むさハ正字鮭小して状鱒小似て圓
肥其子有二胎胞中数十粒呼曰鮠最前尋小進
せハ正字も鮭のりなり文字を忘るぬ医者ハ何
やまゝきて思ひよるる死をいふをなりといふ
いハ文字ハとりちてしそが仕見の業とて青砥
の粉を水ふりきてのませらまバ忽ち河豚の毒を解

して別条なりしを文字知自慢小命をてんと
 する者あり本草を覚（さ）共（き）その毒（どく）或解（げ）こと
 を知り多る者あり是書画のことよ（し）何（な）も茶話
 の一笑小傳（せう）一（い）鮭（さ）の河豚（わ）あることハ論衡（ろん）炮炙（ぱう）論（ろん）杯
 小見（せ）一多ることあり志（し）共（き）ハ書論画論を知り多るとも
 書画を見るときハ不識（ふ）の書画屋小元及（あ）ハざる（あ）一
 或ハ博識（はく）を自負（じ）する人ありて多（あ）く書家小あ
 てハ書論を難（なん）ト画家小會（かい）てハ畫論を問ふ人あり
 共俗小云半可（はん）といふ者ありて華墨（わ）を執（と）てハ豈（あ）尋常（じん）
 の書画家小元及（あ）ハざる（あ）也

書画好小異同あり事

世人の珍賞（ちん）する物先儒流（しゆ）をい（い）々（い）惺窩羅山（せい）丈出（わ）舜
 水藤樹仁齋（すい）祖来（そ）の諸先生（しよ）を初（は）として人（ひと）奉（ほう）て寶（ほう）
 とて去（き）る共（き）學風（がく）のことあるハその流派（りゅう）よりて違（ちが）り
 物学（ぶつ）を學（まな）ぶ者ハ閻（えん）齋（さい）學（がく）を呵（か）も閻（えん）齋（さい）學（がく）を（ま）な（ら）る者
 ハ祖来（そ）を誹（ひ）る是（こ）世（せ）上（じやう）の常（じやう）あり去（き）る共（き）廣（ひろ）く儒流（じゆ）
 を好む人其差別（さ）なくその好品（こう）小會（かい）ハ買取（かい）て挿架（さう）
 とん（とん）共（き）ハ尊奉（そん）とハ（い）ど又好事（こう）の玩弄（わん）あり（あ）る（あ）る
 或ハ堀川派（くろ）ばりを好（この）むあり物派（ぶつ）あり（あ）る（あ）る（あ）る
 あり是ハその門流（もん）を學（まな）ぶ者の收（しゆ）蔵（ざう）する所（しよ）あり其（その）

他諸家者流皆かくのごとくその内儒流も奇跡稀
し茶家の玩弄も遠く徇流も清巖江月翠岩
など人の尊ぶは皆茶人の用とする愛あり其餘
蘄山ハ
柳置月舟山盤珪無難桃水自隱遂翁惠南師
各高僧も奇蹟ある人なれば茶家の珍賞すべき物
なれば其の時小遇ハば收花する者稀なり思ふ
世間の奇蹟も吠る遺墨もてハ俗家のもと免合さるハ
その奇蹟を穿鑿せん人を知る故なりよめて
茶家の玩弄も遠く奇跡遊戯もて人の奇
を称し徳を奉功以歎し奇を讚し已まじき事

劣るまじ人を善し進むとある心あり多きもの
そり実小真の好事者稀なるが故も亦ふらば
物の出ること遠く世人のそてはや品の中も又これ
あるものを好むはなる故も亦真の重寶とな
るその少く世間通用の浅薄のものも高價なる
事とハなる

蘄山紫山書榮悴の事 附茶論

禪家の高僧蘄山紫野の二派今時榮悴の勝劣を
先黄蘄ハ隱元木菴即非南源高泉悦山茲始して
墨池家ハ獨立曼公大鵬唱浪道本を各千里の

波濤を越 本朝小帰化して道德高きものもあらず文
墨も小兼具より一此諸賢の本邦小来る小あらず
只手跡の船来をいつるの好品とすきや大徳寺派
みていそ一休澤庵ハ性豁達ゆして凡小超るりその余
春屋玉室玉舟春澤江月清巖翠岩江雲江雪天祐の
輩得道の浅深ハいふあらずやあらず床頭小掛をき能書
を見む志多進共利休宗旦古田金森小遠公などの
茶人皆此紫山小参禪キ一故おのづから茶道小達
せしと見ゆ故小世の茶家専ら是故貴人小
茶る小與りざる人をもきよて賞する様小あり

書跡小亦稀かり予書画を嚮を業として藥茶二山
の書跡の遇不遇を見る小玉ハ埋りて尾の貴なる小
似りかくし小を予嘗て茶を煮を知りていり
阿らむ里小小當今の茶ハ古道小よる茶小阿らむ別小
一種世事應接の茶とありあるやうなり器物小寶く
らとあり書画ハ事實傳記を去りて只人の耳近き
を尊と或ハ詩文の長くして解をざるハ客小失禮あり
として俗用の書画を用るなどさう小雅事を尚ぶ習氣
なく一種の後世茶の湯ハ多しと見えり茶事の原因
始を尋ねバ俗意あてハ出来ざるとおもはる

茶ハ元來道を學ぶ者書を讀座禪をもる小睡魔
の侵ををさるんが為小喫せしを知識のころり小よりて
茶ハよく禪を小かをひくるとして専ら禪機小より
式法を定免即悟道の一助とせしなり然る小つら
翫弄とありて東山殿の比益盛小なりしハ専ら玩
古の為のこりて既小驕奢の意を生じ是が為小天
下の古器古董書画をこりて集め多しひしなり
是ぞ足利家衰微の基とハありしれが心得あるが事
ことありその後天心慶長の比ハ太閤殿下の機謀小
よりて軍事の用とありし其極小至りてハ利休を

罪をくるその思慮いづ小ありん今太平鼓腹乃
由代小ありてハ主客尊恭の禮儀とありその時小
志とくひてそましく用をなすこと稔熟も背の
むと云ふ處一ささ共玩古の用ある時ハ浮費夥くし
て驕奢の害を生じ軍事の用ある時ハ疑惑の害生
生じ尊恭の礼ある時ハ佞媚の害を生じ又貪
欲の害ハ各三つ小通じてまぬれざるなりそまこれ
を稔熟小用まじバ大小悟道の助とありと云ハ無我
小して用る故なり京師の人ハ能く儉約のこり小
是を用るとしハ是ハ土地の風小して無益の酒食小

代えてもちゆるなるべし。又是禅意の去りしむるも
ふしと全く害のふも何れも江月清巖の書幅何の書
ふ掛ると云を去るべし。今世の茶人とかく珠光利休の
輩をたぐりしむるも多々違ふ。茶意の古道は
さきよのハ掛幅をも茶人の書画の外ふ何れもハ
千年丹頂鶴。萬歳緑毛龜。などの語を書くもハ禅意ハ
面白くさきハ茶席小用を。画も又是小同。又儒者の
書を共宋儒の径語或ハ李杜の詩句など書くもハ
まは禅意小合ておろしりく掛て用あり。當今ハ其用ハ
魚き紙捨て捨べきを用也。是ハ故事より茶を崩し

茶より故事乃意を崩し。茶の茶多きを去る故
事の故よりしむること。紙知むその巧拙を論ぜし。兔角
世ふ少きその紙おむハ笑ふ。魚きの甚しきことな
むや予ある時清巖和尚法問の語を書き。横物紙
壁間小掛あるふある。茶人來りて五字ハ七字ハ一行物ハ
てほしきありとしり。又ある時徂来翁の五言一句書れる
を儒者是を見て云るハ惜むべし。何よりハ文字数少
くして賞心薄し。詩みてをある文章もその如き。全編
ふてほしきものあり。是その望ふ表裏ありて異なり
其意ぬ何なりや。去るべし。予今先輩ハ聞ふあるふ因て

茶より小三害有るを論じて珠光利休の本意を復し茶道の淳素を失はざらん事松祢のよき

妙語時不遇事

予阿る時翠巖和尚の書きし涅槃妙心の一行物を茶人に見せざる小涅槃とハ死せることありとて忌み嫌ふる甚し按小涅槃妙心正法眼藏の語ハ禪家第一の心法にして法華の妙法天台の中道實相浄土の弥陀佛真言の阿字本不生等のごとく此道也肝要の語あるを茶人の嫌ふは有る心也千年丹頂鶴萬歳緑毛龜をよめ浅俗小近きと日をも回して語るべしぞ福壽海無量ハ俗情小喜小

語を共讀経小耳をささぐる故に誰をきりしんあり予又阿る家を訪ひし人刀活人劍と書あるを五字一行なりとてうやくま古筆家の極をとり裝潢小錦繡を用ひて是故茶席小掛より主人云武士ハ人を活む者小帶刀とてハよき悟りありとておびなうし是ぞ禪家小所謂無心なる者と思ふべきをうかりき此語を書ある禪僧殺の字を落すべき様ありしらむと云ふ今世の茶人のきくををて姦商をが裁きりて巧小裝潢せしものにて殺人刀活人劍の妙語を損壞しある大ひなる罪なる一又予老友池田松石澤菴が書きし一應無所住而生其心の一行

を茶人の手より得て大に喜びて云々ハ茶人此意を知らず
して買らるゝが無所住の語に苦心せし故予祇んごらふさと
せどもきくは遂に予が又購ふ事ふありぬと今其語を按る
小自己心ふともある所なきを無心と云ふハ天地同一
て是即悟道の義なり闇の夜ふありぬ鳥のとききれば
生きたぬさねの父ぞ戀しきの歌をど同一ころまで面白
き妙語あるを俗人住家るゝといふと覺えを嫌ふも
笑ふ盛きの甚しきありぬ

圖樣雅俗好の事

今世畫幅を好者を俗字の一行書を好ふひとりて

出来能く共列仙君子道釋などの像ある圖樣を
しつて賞玩するは遠く是ハかのまは向ハ恐怖の
心生む由一ふきふ柳蓮路鳥の款款ハ陰氣の樹
鳥として嫌ひ屈原巢父許由夷齊蘇武昭君などをバ流
きま人成ハ終を全くせざる人ありてきくハ蟬丸を盲
者なりとて忌ミ鴨長明瀧の音を聞を充是ふひとく
あまよふさまり此人ハ皆後世の規本ある先賢にて
尤尊崇すべき故あまぞ利休古田金森小堀彦乃款
つぎの終を全しせざれ共を連ふハ昏迷してころつ
がハ何や一まらるあり聖賢道釋或ハ龍席或ハ牛馬杯

各格法ありて精神を窮めざるは畫くことありて故に尤
肝要とするは多きより志多き一筆の席書一興ふ樂いなる
數墨紙を面白くする時ハ孰も此道紙學びて筆力精
神をつくむるものありて 百年以前の画三幅對の中ハ道
釋の圖を画し紙當今の意まで見バ寺院の掛幅のやう
思ふも理りぞう 先書畫好事の法ハ或時ハ聖賢乃
像を掛て聖賢多んこと欲し或ハ神仙道釋義勇の
像を各その域小くしてんことを欲し或ハ筆力精神の妙紙
見てハ已まが業の不足を歎じ或ハ山水花卉の優美紙にて
暢然として養心の術を思ひ或ハ同好の朋を請い茶紙

點じて雅談小供とするを其真意を遂バ圖樣百品萬
物數を以て樂事とするを魚子身をあり因ふ云當今の書畫
紙好者そのとる所かのく義あり左ハ其大畧紙あぐり

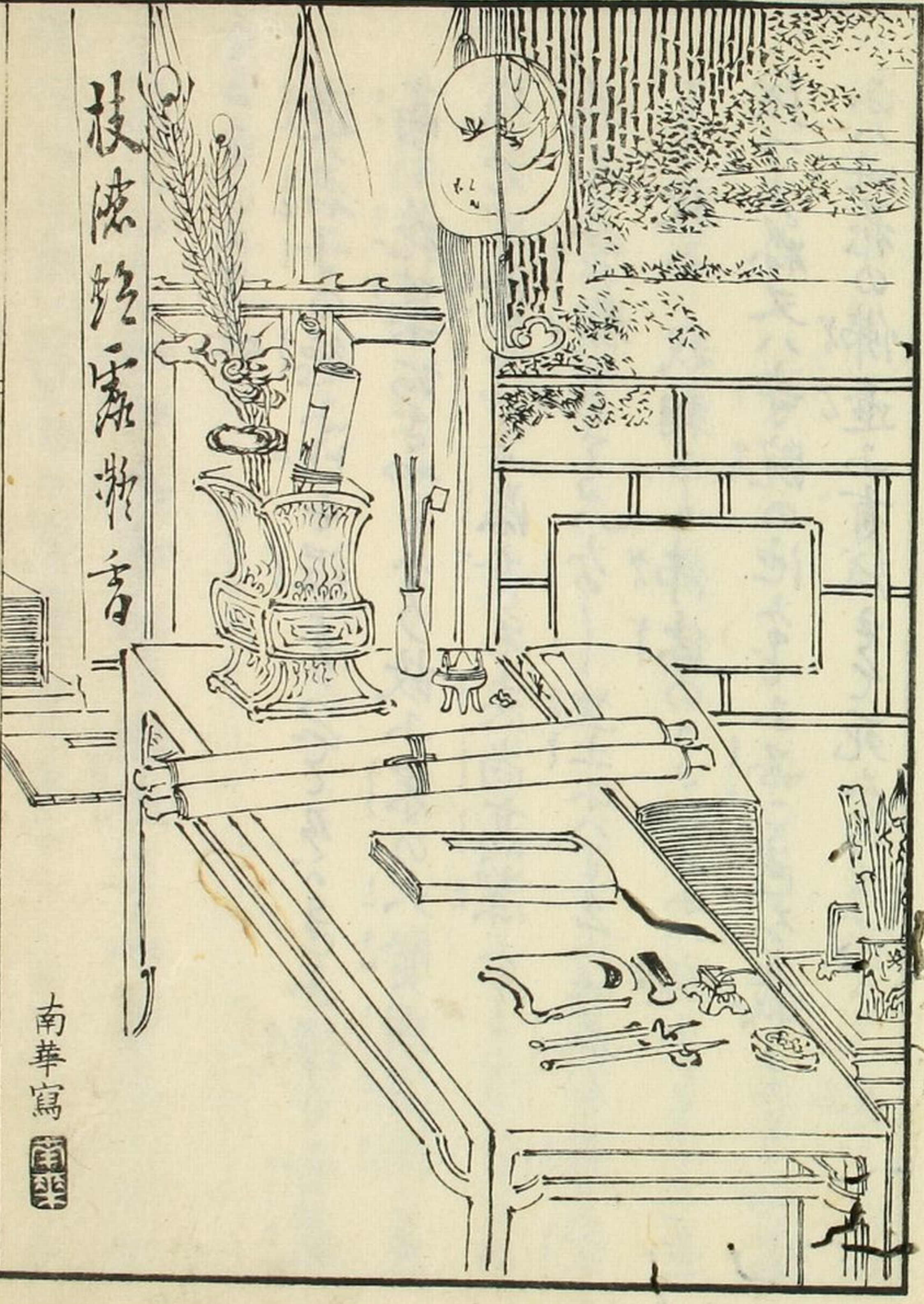
- 一 画を學びて業の巧なるを好者
- 一 鑑定紙好て精神風韻を賞する者
- 一 好事小くして圖樣の異なる紙その分者
- 一 業の巧拙を不論人物紙愛する者
- 一 畫者小不拘飄逸の作を好者
- 一 華美小くして着色没骨を好者
- 一 灑落小くして澹泊なるを好者

卷之二

二

六

枝
德
於
露
漸
香



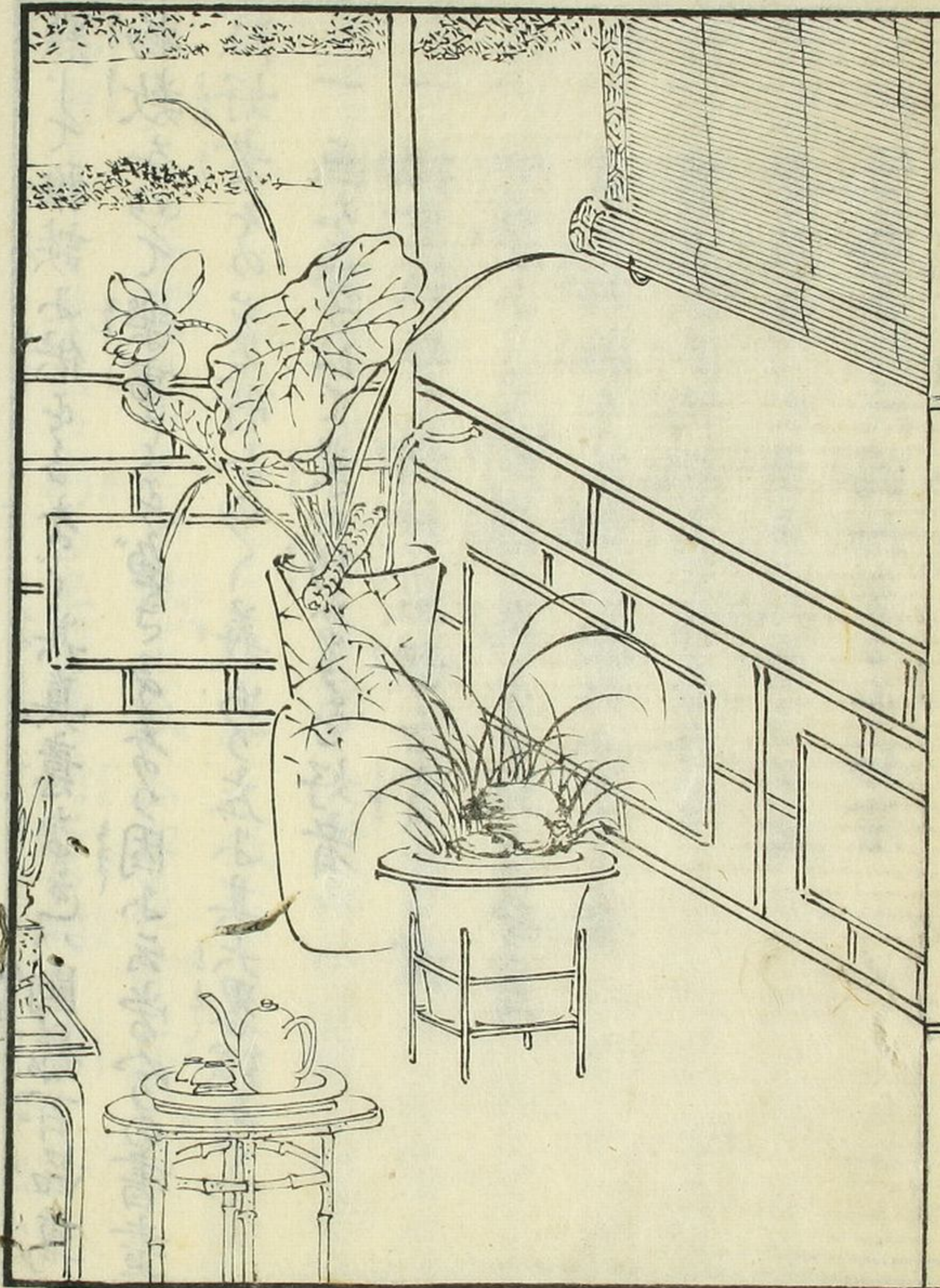
南華寫



卷之二

二

六



51

18

右好所の者ハつゞきハ実意ナリ予ググトキハつゞき此を
このむ小つゞき鳴呼是書画を樂者ナリ也書画小苦心
はるそのあり也

蓮ハ君子の徳小比ヒ泥よりいでりる小深也香氣
高く花葉ハぎやのあり故小宋の大賢周濂溪こそ
此免で愛とる後世を志尚高潔ある者皆この
花を賞觀とるハナリ一竺土小ハりて此花を尊崇
はる故小我朝中モ佛像のつゞき小瓶小とるて是
成つて祿又ハ寺院の池をど小必こそを栽るなり俗意
小ハ此花の佛邊小有成とて死をいとふ心より忌と見也

婦女小兒の見ふて男子とるその心を清く徳を修る
氣象なきハ憐むるなり因小云豫樂院殿雪舟が画
る雅摩の大幅長二尺八寸横二尺五六寸也何るべき成度
浴園の床小掛ハゆひをかる大幅を何とて掛らる
小やと何小夜會の茶小出掛遊むるなり又四季
各極ハ文とる或ハ月日など何ハ時節相應小と一畫
圖夏ハ冬のみ冬ハ夏の圖成かくることありと何らま
とあり又春の茶の湯會小日寛の葡萄の画成掛ゆひ
こと何り賛小春雨の字何り成とるなりとモ槐記
が小名公の所為也やとる事なり

和歌連俳作意好嫌の事

今世和歌連俳作意好嫌の事
 今世和歌連俳作意好嫌の事
 傷歌或ハ戀歌或ハ述懐或ハ送別の類紙嫌ハ又俳諧發
 句を詞のうら小忌多きこと何と云ふ意ある紙嫌ハ
 ことあやむる甚きあり四時循環して暑往て寒
 来り無心の花を盛あるふ何れも人紙まねき衰するふ
 つりてハ人さうて来どあるハさうの吹みて雨ふ志不
 風ふらさるあささ紙思ハ暑の堪なく蚊のうるささ
 負き人のやうくふ漬ぐこと紙思ハ秋の何れハあづ
 出小感一ゆを落葉して鹿なく時のうらゆに思

いづまをあれなきるハナリ 和歌俳諧の真情と云ふ
 うのしとぞ一貫之朝臣の述ぬハ愁傷愛慕戀その
 所ふいづささバ鬼神紙をうごう 猛きはうふて哀
 つふこと紙志ささる武士の心紙をやうくこと何れと云
 定家卿小倉色紙のうちを七分常今の懐紙短冊好乃
 意小合魚の志さ共歌学者俳諧者流のハハなる
 陋習ハ云さること少て皆聲小吠る徒尋常の茶人の風小
 化さす世作意ハ世多小媚多きこと紙好ハ紙中の換懐
 多るをバ廢する小多きあり実小たのりしきこと云ふ
 後ハ真跡世小さうて贋作のこの通用と云ふん

先多とていそ其角が句よ

せめてその多之柿小梅乃花

と是况味ある句よ其俗士ハ負之といふ字はまじ

去るまじや也紙翁が深川ハ負の中とて

米買小雪の代衣やあけ江中

といハ是ハ負之ハその句よなり多き共詞の上よ何し

されバいこき痛ことなく人皆是紙よりこり史登が

腰ぬらのきよあひる鳴子丸

といを腰ぬけの五文字紙忌嫌小なり是も真不好と

離人ハその况味を去りて賞をまじも俗士の好小合れ

バ販買の通用ハ遠一其真小好とる好家のいも

出ざるこそうこなき凡そ人ハ尊歎富貴ハ處してハ世情

ふうしく哀まといふことなきとる難き故小書成

よと道成学びて人情の向背世事の變態紙をさとり

日さちふ一志なきバ詞野鄙あて逸あるものいそ

あて感づること皆道小入るのけなり讚称慶賀の詞

ハ大抵皆富貴小て野逸小とる感づる所をくち

昔齊景公大國小王多る日の長久をんこと紙欲一死を

成りたりと多まる小側小何り史孔梁丘據諂諛て共小

泣きまバ晏平仲ハ獨笑て死生去來の道理紙さとり

景公大小慙多いひひとなり人壽大允七旬と定まざるを
 先五六十いして足るものなるは龜鶴の千萬は羨まざる
 その三分一を同くしんは五の中大小いふいあるは
 人よくその情理を知り安然として生涯をあくりおはる
 場ふ及んで八帰路のころして別小驚くべきものをいふと
 思ふる予いふと所ふいふとさきいふと必覺末を
 萬物命数ありそのうち人の智ある故に四情深一よく
 智は情を制して古人の龜鶴はよろらぶ長壽
 成尊ふをまじ共鶴は食成少くして身成保ち龜は氣
 を吸つて食を飼ざるをありと云ふると人の寡欲

て心成浩然小養ふとて一人をまじ龜鶴の如く
 五十ふして命成終るべき前定の数をまじ清心省慮
 て諸欲成制し寡くせば百壽を保むに至るべきを
 近世一茶子が辞世の句としてア、まよよ生ては龜の百分
 とはあそりるべきなりなり

墓碣碑帖の事

書成學ぶ者先楷書八雲世南廟堂碑顔真卿多寶塔
 碑家廟碑歐陽詢皇甫君碑九成宮銘柳公權玄秘塔
 碑等の類を以て善とて行草八二王帖成始として玉煙堂
 停雲館戲鴻堂より以下諸法帖のぞゆる小いと傳はるる

篆書八李斯の嶧山碑李陽冰の三墳記以て第一の隸書ハ漢碑数百種夏承體ハ一種のその小して曹全碑以て一と云唐碑ハ梁昇卿御史臺銘史維則大智禪師碑を善とい行書ハ李北海雲麾將軍尤佳品とい書法學ぶ者ハ碑刻紙以て一と法帖佳品ある紙二とい一廣澤翁の以より安永天明間までハ碑本至て稀なり一と文政中新渡船來して今ハのまほしく志する一と紙得たり又和帖墨本正面摺ハ近世予友杉本望雲あるその清法ハ儼然得て尤髣髴より実ハ文墨のひびくる時をまじりと云ふ志するハ古碑墓碣銘ハ寺院の塔牌ハ篆一きその

書法學ぬ君子是故机上未排置して和漢同一小殊雅を俗士の福祿壽或ハ千年丹頂鶴など紙まてを眼より見ハその身法晋唐宋元の墓所ハ置ハ似多りと云一萬卷書開見古人といハ見識を俗意ハよる時ハ生前の人亡人故友と云ふの心といハ嗚呼雅俗の意懸隔かくのぬ一

真蹟の劣墨刻ハ勝る事

真跡ハ至て稀ハ一又碑帖の及ぶ處きまハ何れも謝在杭云大抵真蹟雖劣猶勝墨刻之佳者といり上古ハ姑置元朝以來趙子昂の書画尤贗作あび多し一明ハいつてハ唐寅吳寬ハ姑置文徵明董其昌の大家贗本幾百種と

つこと諸書よいて世人の知る要なり故小文人雅士真蹟
の此土にあるべきやなりと云ふハ理りなり然も其又さ小
説あり多と贋なりといふ古其時代小して門弟子或も
能仿ふ者の傳寫なり又墨刻の佳なる小勝るものあり
是ハ手本と云ふふ多る物なまば價小よりて枚花多き
あり又墨帖といふも贋本多きことハ此道の諸先生小問ひ
尋て知る也

米庵先生之説也

書畫臨寫可謹事 附裝潢字義

廣澤先生云米元章其花多る王羲之の真跡来禽帖
の事云々曾經人用薄紙搨書墨即透致行仍行靜

地深可歎息云云又云影書ハ尤大切小は黄硬紙を作
りて遊絲筆紙をて明窓小向ひて手のきりぬる細心の人
寫さむと云ふと書画ハ尤く阿るべきものなり又云書畫紙
表具なる紙裝潢装池とも云ハ四方小縁あるの稱なり池
淡いけなり池ハ四方小堤あるなりと巻軸ハ掛物紙
横小見多る物なるまバ今の巻軸ハ甚略ふして書画紙愛
護する心小ハかなづくと云ふ

於菟按小裝潢の潢紙淡池の義なりと心得て装池共
いハ誤りなるべし 裝潢の潢ハ上声 元來唐の六典小裝潢匠
といふ者ありて即ち今の 官府の表具師なり潢の字を

釋名小潢ハ染紙也といひ廣韻小潢ハ染書也といひて
 表具の時黄蘗の汁紙をて紙小色紙付ることなり是ハ
 蠹虫をとり生ぜぬ為なりとぞ故小六典の註小毛装成
 而以蠟潢紙也と見ゆ後の人新奇の説考一出して
 四方小邊ある故なりと云ハ牽強小近一此より外庵外
 集真珠船をとり小委一久辨一多邊ハ併を考ふ處一

近世名家書畫談二編卷之一畢

